

東脊振小中連携通信

R4年12月23日(金)

<第6号>

文責：小中連携推進委員会

小中連携推進事業2年目 小学校で公開授業！



11月18日(金)の5時間目に、東脊振小学校6年1組で、太田宗平教諭の「算数科」の公開授業を行いました。単元は「比例と反比例」でした。地元の教育委員会を始め近隣の小学校、隣の東脊振中学校からと多数の参観者が来られ、教室に入りきれず、隣の教室にライブ中継をしながらの授業となりました。授業の冒頭で、太田教諭が課題提示で大きな揺さぶりを掛けて授業がスタート。子供たちが太田教諭からの挑戦状(?)を受けて立つという展開でした。授業後の授業研究会では、筒井久美子研究主任の研究の概要説明のあと、山下健教諭の司会で、パネルディスカッション形式で、授業の視点にそって協議が進み、よかったところや改善点など、活発なご意見をいただきました。最後に、東部教育事務所の吉岡功太郎指導主任より指導助言をいただきました。

◆授業研究会での吉岡指導主任からの指導助言

- ・子ども達と自然なコミュニケーションがあり、素晴らしい学習集団をつくられている。子ども達も前向きで表現力がある。後ろに掲示してある社会科新聞にもびっしりと書き込まれていた。
- ・今回の授業では、これまでは「数量関係」、今は「データと数量関係」になっているが、表を縦に見たり横に見たりして比例の定義やきまりに迫る内容だったが、よくそこを選んだものだと思うほど研究授業としては難しいところだったように思う。そこを見事にコーディネートされた授業であった。
- ・「正しいものは正しい」とか「それは違う」とか、学習内容にゆさぶりを掛けられて、本時の視点でもある「問いをもって主体的に取り組む」授業を目指されていた。
- ・めあてを子どもと一緒に作っていかれたところもよかった。



- ・先程、「見通しは必要なかったのか？」という質問があったが、あまり見通しをもたせると解答までいってしまう場合もある。今回の授業に関しては、見通しはなくてよかったのではないかなと思う。むしろ、本時(第3時)にいたるまでの第1時や第2時の授業が見通しだったのではないかな。
- ・この授業では自力解決に9分時間を取られていたが、これだけ書いているのは日頃の指導の賜だろう。振り返りの時間でも、たくさん書いている児童が多かった。
- ・机間指導も、児童の考えを吸い上げ授業づくりに生かす大切な手法である。ICT活用で資料の出しっぱなしだけではなく、「これのどこがいいと思う？」と問うことで、児童の主体的な学びにつなげることができる。
- ・また、この授業では、ペア交流がたくさん取り入れられていた。しかも、目的や場面に応じて4人グループでABCとペアの組み合わせが変わっていたのも上級生らしい対話のパターンであった。低学年ではなかなかうまくいかない。高学年だからこそできる形式ともいえる。
- ・お互いのノートを見せ合い、サインを書かせるというのはいきなり感はあったが、表現力を鍛えるいい機会。表現を学び合うとともに、「ここがいいね。」など、いいと思ったことを書かせるのもいいのではないかな。
- ・児童からの考えが4つ出て、それを教師の方で板書されたが、これは子ども達にゆだねてもよかったのではないかな。その子なりの表現があるはずである。
- ・また、チョークの色にも意味がある。同じ項目のところは色をそろえると子ども達の理解も得られやすい。



日頃の地道な指導・支援の積み重ねにより、子供たちが着実に力をつけてきていることが十分伝わってくる授業でした。太田先生、お疲れ様でした！

東育振中学校で、社会科と理科の公開授業！

12月9日（金）の5時間目に、東育振中学校の2年A組で永田公平教諭が「社会科」を、2年B組で中尾裕二教諭が「理科」の公開授業を行いました。

社会科の授業は、東日本大震災で深刻な被害を受けた東北各県の復興案をグループごとにプレゼンテーションを行うものでした。ルーブリック表に基づいてABCの3つの評価基準で相互評価し、それをさらによりよいものに仕上げようという内容でした。

理科の授業では、電熱線に流れる電流と電圧の関係をもとに、それぞれ電圧計と電流計をどのようにつなげるのか考え、そのデータを各班でエクセルに打ち込んで結果を考察し合うというものでした。どちらの授業も、生徒たちの主体的な学びを引き出そうという意図が感じられる授業でした。



授業研究会では、吉田喜美子研究主任が研究概要を説明。この2年間の集大成で、「夢をかなえる地図」「夢に近づく第一歩」「単元計画表とふりかえり」「基礎基本定着のための学習活動」「フォーサイト手帳」「ナビゲーションシート」など様々な取り組みをコンパクトに紹介しました。よくぞこんなにたくさんの取り組みができたものだと参加者から驚きの声があがりました。しかも、それがスムーズに生徒に浸透しているので、この研究の本来の目的である「学力向上」も徐々にその成果が出てきているとの報告でした。

【東部教育事務所：飯塚指導主事の指導助言】

- ・今年の夏の小中合同研修会で聞いていた取り組みを職員全員で共有実践されている。今、着実にその成果が出てきている。
- ・導入の工夫、評価基準の設定、単元を見通した単元計画表、また、ワークシート集やふりかえりシート等、教科の枠を超えて全教科で足並みをそろえて取り組まれている。
- ・佐賀県で取り組んでいる「授業づくりの1・2・3」のめあて・まとめ・ふりかえりを意識しながら、さらにステップ2以上を目指している。
- ・社会科では、「主体的な学び」を追求しての生徒のプレゼンテーション力が見事であった。
- ・理科では、時間が足りなかったのが惜しかった。班ごとの意見を練り合えばさらによかった。

【早稲田大学教職大学院教授：田中博之先生の指導助言】

- ・小学校の「学びに向かう力」、中学校の「学習マネジメント」。この9年間を通した取り組みが定着すれば、素晴らしい成果が期待できる。ぜひ、継続して取り組んでいただきたい。
- ・「自己マネジメント」については、自著の赤い本、青い本、黄色い本の3冊にもまとめている。
- ・学力向上には、様々な取り組みがある。その中で、「ペア学習ファイル」という取り組みを行っている学校がある。学力が着実に伸びてきている。『タブレット活用の事例』という本にも様々な事例を掲載している。
- ・理科の授業：「めあて」と「課題」は違う。課題は、解決しなくてはいけないクエスチョンである。「～しよう」というレッツ型の「めあて」よりも課題の方がよい。秋田、福井、石川県もめあてより課題である。
- ・社会の授業：「深い学び」にするためには、条件が必要。条件を吟味して、再構成・再構築を行っていくことが大事である。それに取り組もうとしている点が評価できる。
- ・令和の日本型教育として「個別最適な学び」「指導の個別化」「協働的な学び」が示されている。
- ・ルーブリックに沿った評価は今後注目される。実際に行っているところも多い。
- ・「協働的な学び」一人一つずつ、4つの観点から分析。一覧表を作成して比較することも有効。
- ・カリマネ：大括りでとらえさせる。パフォーマンス評価等、様々な取り組みがある。
- ・グループ学習には、3つのしぼりがあり有効。（やらないとみんなに迷惑、自分だけできないのは恥ずかしい、できたら拍手をもらえる）特に、異性から褒められるのはうれしい。
- ・全国の実践例：社会「室町時代は〇〇な時代である」〇〇を理由をつけて考えさせ、発表させるだけでも、深い学びにつながる。基礎・基本の「学び直し」は、学力向上のカギとなる。
- ・多様な発見こそ協働的な学びの成果である。ルーブリック（3観点）：自己評価・相互評価をしながら、また、日頃の授業の中から資料活用能力も育てていくことが大事である。単なるワークシートの穴埋めでは力は身につかない。
- ・広島県のある学校では、“学び合い”でペアファイル学習を行っている。学力向上は団体戦である。お互いに予想問題集を作成して解き合っている。予想問題づくりには、学び直しがある。逆転の発想である。
- ・ペア学習も効果がある。学力テストでの表彰や放課後学習を行っているところもある。
- ・横浜の横須賀市では、テスト直しレポートに取り組んでいる。100点だった生徒は、応用問題に取り組む。締め切りは1週間程度に設定。年間5回で学力も伸びている。
- ・ふりかえりカードは、学習評価ハンドブックにもなる。
- ・学習評価につながる学習改善が必要。改善項目は10項目くらいある。（間違い直し、友達と対話、見直し等）
- ・高校でも、フォーサイト手帳を使っている。このようにタイムマネジメントできることは素晴らしい。
- ・これだけたくさんの取り組みを行っている貴校に、あえて申し上げる課題は、「自己マネジメント」であろうか

※ルーブリックとは？

学習目標の達成度を判断するため、「評価の観点（規準）」と観点の尺度を数段階に分けて文章（記述語）で示した「評価の基準」から構成される評価ツール。

